SHINCLUB 69

(株)辰　東京都渋谷区渋谷3-8-10　JS渋谷ビル5F　　tel/03-3486-1570　　fax/03-3486-1450　　URL:http://www.esna.co.jp

南砂町クリニック全景　撮影：斎部功
（写真とトークの本文は関係ありません）

今月のトーク/monthly talk

構造計算書偽造問題

今月は、この問題に触れなくてはならないでしょう。「構造計算書偽造問題」。この、設計者にあるまじき詐欺事件が明るみに出て、辰とお付き合いのある構造設計者、藤下高士氏が、早速アクションを起こされましたので、ここにご紹介します。

藤下氏は、弊社宛に「1. 大臣認定プログラムによる一貫構造計算書についての確認申請時の考え方および取り扱いの資料」「2. 辰より委託された藤下氏の構造計算について十分な強度を存することの確約書」「3. 構造設計者としての考察」などをご送付くださいました。そこで、藤下氏にお会いし、問題点についてさらに伺いました。

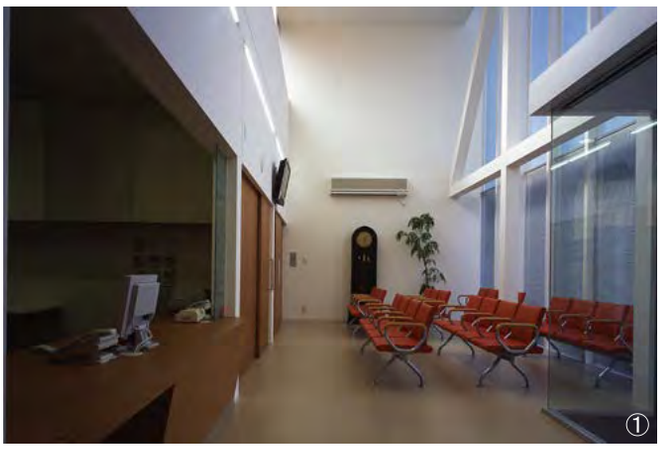
—今回先生が早速アクションを起こされたことは、とても大事なことだと私たちも思いました。
藤下：今回の偽造問題の背景として建築の受注形態を考えたときに、まず下記のようなこれまでの業務フローが考えられます。

施主—元請設計事務所—確認申請—施工会社
　　├ 構造事務所 —下請構造事務所
　　└ 設備事務所 —下請設備事務所

こういう図式の中では、元請の設計事務所や設備事務所は、オーナーと顔を会わせる機会が何度もあるのですが、構造事務所はオーナーと同席する機会がまったくない。辰の場合は皆一同に介して顔を見せる場合があります。「施主と構造設計者が顔を合わせる」、これは双方に大切なことです。責任感も生まれる。
—一昔前は、構造の先生は、意匠の先生に比べ、なかなかものを言わせてもらえなかったということも聞いたことがあります。
藤下：そうですね、職人気質で口数の少ないことで通用した時代もありますが、今は構造設計者も提案力、企画力を求められています。それにいくらいい意匠設計をしても、構造設計が成り立たなければ事業そのものが成立しませんから、意匠の先生もYES、NOを求める、非常に重要なポジションになっているのです。構造設計者がブラックボックスでいてはだめです。
—大臣認定プログラムなどを拝見すると、省力化が進んで計算のチェックも繰り返し行えるようですが、構造計算書そのものは普通の設計をやっている人でもすぐには、わからないのではないですか。
藤下：構造力学をきちんとやった人ならある程度わかるでしょうが。今、日本には一級建築士が30万人、そのうち構造設計者は約1万人です。法的なものではないのですが、日本建築構造技術者協会が認める構造士という専門の資格は、一級建築士を取得して7年が必要です。日本全国で2500人、いわゆる構造のスペシャリストはこれだけしかいないんです。そして、そのうち約半分はゼネコンにいます。独立した立場の人は1200人くらい、という計算ですね。
—施工会社に入っている人は、言いにくいこともあるでしょう。
藤下：そうです。しかし、事業主、デベロッパーなどと仕事をする上で、もしも今回のような場面にあったら「絶対に辞退しなくてはならない」、というのは正常な人間の感覚です。「なんで、そんなことをするのか」メリットは一つもない。医者が患者を殺すようなものです。

—プログラムが改ざんされた様子は具体的にどういうものですか？
藤下：確認申請においては、設計者は、構造計算書の「**その1**（設計方針、応力や断面検討、設計者のコメント、チェックリストなどで構成される。**その3**の計算結果が所定の用件を満たした場合に大臣認定番号、計算時刻がヘッダーに打ち出される）」、「**その2**（小梁、スラブなど、**その3**に含まれない部分の計算書）」を必ず提出し、それらのベースとなるデータの「**その3**」は検査機関の求めに応じて出すことになっています。今回は、この「**その3**」の部分を偽造したんですね。数字を差し替えたんです。
—しかし具体的に伺うと、そもそも大臣認定の番号そのものが付いていなかったとは。プログラムに依存した体制だけでは、不十分ですね。
藤下：確認はポイントがわかっていない人にはやはり難しいでしょう。また、施工会社はその会社の施工ノウハウを持っています。そこでおかしいと思う現場監督でなくてはならないのです。コンサル会社も競争に打ち勝つために無理をして新しい工法などと言って、おかしくなる。
—そういう中で横並びで見られることは、やはり避けたいですね。
藤下：そうです。だから常にいい仕事をしていきたいと思いますよ。信頼関係こそが仕事をする上で一番大切なことなんです。
—今日はどうもありがとうございました。

南砂町クリニック新築工事

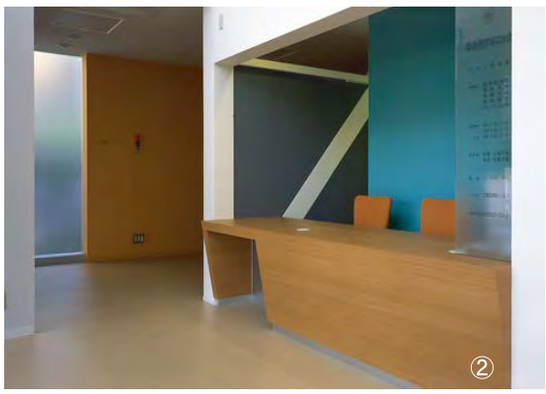


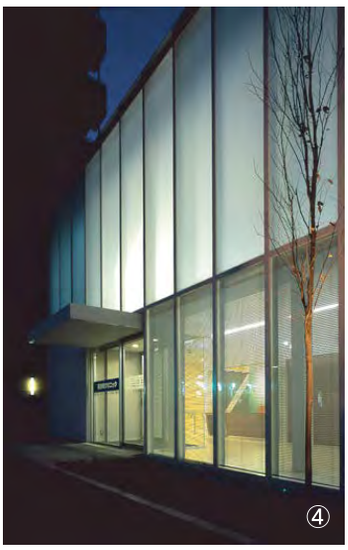
地域に根ざした専門医院

以前設計したクリニックを見て、デザインを気に入ってくれた建主からの依頼である。この地域の容積率ではもっと高い建物も建つが、ご希望にそって、敢えて低層で印象的なファサードのクリニックにした。

脳神経外科医として専門領域で活躍されていた建主は、頭痛をを中心とした症状を訴える患者に対して、的確に対応する診療をめざしている。例えば、頭痛に対しては、脳腫瘍、脳卒中などの脳神経外科の領域以外に、整形外科、神経内科などの病気が疑われる。加齢による機能低下にはリハビリテーションによる回復治療が欠かせない。中高年の多いこのエリアでは、効果を発揮する医療機器を充実させることが患者の確保に繋がる。高機能のCTやX線CR装置（デジタル画像読み取り装置）も設置しリハビリテーションスペースも広くとってある。

（関根裕司）





① ロビー全景。高い天井。南側の天窓や北側ガラス面からの透過光で明るい室内。座席の正面が処置室。 ②正面受付。向かって右手が待合室。左手がリハビリスペースに続く。受付の裏側に薬剤調整コーナーがある。この医院では近くに調剤薬局がないので、薬を医院で出している。③リハビリスペースを庭より臨む。ウォーターベッドも備え、高齢者が多い地域のニーズに応える④玄関夜景。建物の前に駐車スペースがあり、広い通りの高いビルにはさまれた明るいファサードがひときわ目立つ。⑤ロビー天井は6.15mの高さ。開放的な空間が患者の心を癒す。

所在地：江東区
構造：軽量鉄骨造
　　地上2階
用途：医院
設計：関根裕司
／ARBOS

フェリスKY　　改修工事

竣工当時の写真から ①全景

②3階。オーナー専用部分。

③3階テラスと屋上の緑化が映える。

所在地：松戸市
構造：RC造、地上3階
用途：共同住宅
改修設計：
関根裕司／ARBOS

緑化と暖炉のある家

10年前の施工物件のリニューアル。1、2階が賃貸住宅、3階がオーナー住居である。外壁の塗装、リビングのフローリング張替え、ペットスペースから寝室への変更などを行った。竣工当時、施主のご主人の好きだった椿を多数、テラス、屋上に植え替え、また5.5mの煙突を持つ暖炉をしつらえた。賃貸住宅の名前は、ご夫婦のイニシャルを取っている。

床は飼い猫が歩いて傷つけてもかまわないティンバーストランドにした。

（関根裕司）

①今回増設したベッドルーム。②リビング。暖炉前の床暖房をやめ、傷んだ床を張り替えた。③3階テラス。芝生と木の潅水システムのバランス調整が難しいが、屋上とともに木々はよく育っている。kのほか外壁の塗装も行っている。

クリニック　関根 裕司／ARBOS

関根　裕司　（せきね　ゆうじ）　profile

1958年　東京都生まれ
1980年　千葉大学工学部建築学科卒
　　桑田建築設計事務所勤務
1985年　　同事務所　　退所
1987年　ワークショップ勤務
1993年　　同　　退所
1997年　㈲ARBOS（アルボス）設立　現在に至る

主な作品
クリニック、集合住宅、専用住宅、店舗など多数。

—今月は、「南砂町クリニック」の設計者、㈲アルボスの関根裕司氏にお話をうかがいました。

—HPを拝見しましたが、クリニックの設計を多く手がけていらっしゃいますね。項目が別に設けられていました。
関根：クリニックの建築は、専門的な知識がないと難しいものなんです。私の場合、大学卒業後、すぐ千葉大医学部の先輩方がクリニックの設計を依頼してきましてね。先輩も気軽に頼めるということなんでしょうか、何件か手がけたんです。医療現場の資料なども教えてくれて、それが今の仕事のベースになっていますね。

—その後、桑田建築設計事務所にお入りになっています。
関根：千葉では大きい方でした。官庁の仕事が主で当時は実務ばかり。設計監理だとか、今でも実務は自信ありますよ（笑）。そのうち、先輩の産婦人科の仕事が来て、27のとき、いったん独立しました。武者修行に出るつもりだったんですけど、周囲の皆さんから独立すると思われ、またクリニックの設計の依頼が来たんですね。結局3件ほど設計してから、ワークショップ（北山、谷内田、木下3氏の設計事務所）に入りました。

—なぜワークショップに？
関根：目指しているデザインが、ワークショップさんのものに近かったんですね。学生時代に大学院の先輩の仕事を手伝っていたのですが、流行っていたのが、ラショナリズム（合理主義）。自分が読む本もちょっと年代が上の人のものが多くて、北山さんには「関根君って、俺たちと同じ年代の人みたいだね」と言われましたよ（笑）。
　デザインワークはそこで教わりました。当時事務所内では、大きな物件をやってきた人間が結構少なかったので、桑田事務所でも経験があったし、2件ほど担当しました。約5年いましたが、ノリが良い雰囲気でしたね。「いいところに来たな」と今だに感謝しています。

—ワークショップからの独立が35歳くらいですね。
関根：基本的には専門はクリニック。だから仕事はある、いう感じでした。

—クリニックの設計というと、具体的にどのように大変なんですか？
関根：お医者さんにはお医者さんの文化があるんです。それが具体的にわかるまでは経験が必要ですね。ライバルは、設計屋さんでなく、薬屋さんの連れてくる内装業者です。仕事は、設計プランが採用されるというものではなく、ドクターの話相手になれるかどうかが決め手。

—話のレベルについて来られるかどうか、なんですね。
関根：そうなんです。お医者さんは、医者であると同時に経営者。大病院にいたときは雑用としか思っていなかったことも独立と同時にやらなくてはならないでしょう。例えば、「レセプト」と呼ばれる、保険請求の書類の精査も、大病院にいたときは職員がやっていた。それを自分でやらなくてはならないですし、そういう細かい仕事を全部自分でやるとなると、お医者さんにもいろいろ不安が出てきます。そんなとき「他の医者はどうやっているのか」という情報がほしいんです。
　それなのに、20代の頃は、依頼のあった仕事をそのまま素直に設計していたんですね。30件くらいプレゼンテーションをやって、受注できるのが、せいぜい1件でした。「競合している医院建築専門の設計者や内装業者より、プランが悪いとも思えないのに、何故だろう」と当時は思っていました。30代になってきて、やっと「なるほど」と理解しましたね（笑）。

—若いということだけでもハンディでしょうからね。
関根：それから、お医者さんでも甘い考えで独立を考えられていて、いざと言うときに融資が下りないという方については、計画自体が成立しないので、今は話が来た場合、まず「事業計画」を立てることから始めています。スケジュール（今の病院を辞めるタイミングも含めて）や、事業資金など、ある程度の時間を見計らってから、雑談の中で本気かどうか確かめる。何よりも人間関係の形成が必要、あうんの呼吸です。薬問屋さんは、この気の使い方がうまいですね。
　ところが最近は、医者と医薬業界の癒着を防ぐため、医薬分業がすすみ、診療は医院で、薬は院外処方で調剤薬局が受け持つようになってきましたから、お医者さんは相談相手がいなくなっちゃったんです。それで私のような設計者が話を聞く機会が増えてきたんですね。

—蓄積されたノウハウが発揮できる、ということですね。
関根：薬問屋で昔から付き合っていた社員が、今社内では部長だとか役員になって偉くなっていますが、そういう人たちから私は教えてもらいましたから、今も情報交換をしています。むしろ最近のプロパーの若い人のほうが常識がない場合も多く、逆に私たちから「そういうことをやっていたら、ダメだと思うよ」と教えてあげることがあります。

　クリニックの設計をやってきて、面白くなってきたのは、各先生の診療方法をじっくり伺って、「それまでの医院建築のプロトタイプが、必ずしもベストではない」ということに気が付いてから。それぞれ先生の治療にマッチした独自の空間があるはずで、こちらもそういうデザインを提案するようになってからです。今回の「南砂町プロジェクト」のO先生のように新しい医療方法を進めている先生の仕事もくるようになりました。

—お医者さんも競争激しいですからね。
関根：そうです。何か目玉診療を持っていないと、生き残れない。診療点数も、法改正でどんどん変わってくる。診療報酬の金額が大きく変わります。今まで金のなる木だった診療が、とたんに経営の圧迫材料になる。MRIやCTの機械もものすごく進歩していて、昔は高額だった機械が今では安くなっている。保険点数が下がる直前に高額の機械を買った先生は返済計画が大変になります。だから、情報収集は怠りないようにしなくてはならない。医療コンサルティングの方たちの勉強会に出ています。この先どうなるか、見通しを立てていかないと、お医者さんの不安に応えられませんから。

—そうですね。ゲノムが解析され、診療内容そのものが大きく変わってくることが予想されると聞きました。
関根：お医者さんは、脳神経外科、整形外科、神経科、内科、外科など、科によって診療テリトリーもあるので、どういう治療を自分がしていくのか、細かい部分まで的確な判断が要求されています。
　私自身は、ほとんどの科のクリニックの設計経験があるので、今後もお医者さんの立場になって一緒に考えてあげていきたいですね。

—どうもありがとうございました。

私の1週間②

辰の現場監督が毎回登場します。

十一月十四日(月)
五本木Nハウス、内装仕上げ工事中。今日は造作大工のフローリング貼りだ。大山工務店は専務の指示が細かく、それでいて大工さんに任せている。信頼関係が厚い。九月末の上棟式を境目に、一つ山を乗り越えた感じだ。が翌日から一週間、本来なら仕上げ工事に向けての準備をかなりつめておくべきだった。この先どんな仕事が待っているか、読めなかった。職方がみな年上で、経験が浅い自分には躯体工事も大変だったが、今と比べればまだましだ。先輩の下についているときは、責任がないせいか他人事だったのだ。今はそれがわかる。「これほどの仕事があったのか」と後手に廻ったことが悔やまれる。
現場には十一月に入ってからは土工をいれず、細かい作業は自分がやっている。予算がないせいもあるが、できることを自分でやって覚えたいという気持ちがあるせいだ。「現場監督はプレイヤーではいけない、それは自己満足にすぎない」こともわかっているが・・・・。

十一月十五日(火)
引き続き、大工は床を貼る作業。天井・壁に下地を貼り、ペンキ屋が塗り込み作業の準備に入る。

十一月十六日(水)
大工が床の木枠を作成中、ペンキ屋が下地処理を続けている。十八日には、階段手摺の取付があるので、墨出しをすませておかなくてはならない。しかし、自分では実際にはやったことがない。
同じ現場事務所で下馬の物件を担当しているMさんは大先輩だ。この現場の前の配属先だった広尾でお世話になったが、自分は夜現場が引けて事務所に戻ってからも毎日Mさんを質問攻めにしている。

岩本　健寿

抜擢された現場管理
心強い師匠の存在

十一月十七日(木)
秋とは思えない陽気が続いていたが、今日は急に冷えこんだ。引き続き昨日と同じ工事。墨出しを今日も行った。夜の寒さがしみる。

十一月十八日(金)　階段の手摺の金属工事。
飲みながら、会社の話や建築の話になる。墨出しも一人じゃできないだろうと、明け方まで作業を手伝ってくれた。ホントに感謝している。ありがたい師匠だ。

十一月十九日(土)
夜九時半、久しぶりに早く帰った。現場が始まってからほとんど毎日〇時四十九分の終電だ。朝も七時台には現場に出るから疲れるが、唯一プライベートタイムが持てるとするとこの土曜の夜だけだ。
自分でも負けず嫌いで背負い込むタイプだと思うが、まとめたいので日曜日も休めない。学生時代に七年間かけて机上でやってきたことは、この五ヶ月の現実のものづくりの過酷な日々にかなわない。

十一月三十日(水)
今日は足場バラシ。これまで新人は、鳶の手元になりがちだと聞いていたが、自分は毅然と道路から進行状況を眺めていたい。「そのとき君にもしこみ上げてくるものがあったら、本気で現場をやっていた証明であり、それは人生の宝物になる。何も感じなかったらこの仕事から手を引いたほうがいい。だから何もするな」という社長の業務命令もある。
この仕事はとにかく経験だ。できるだけ早く一人前になりたい。自分でやれば達成感が違う。複数の現場を抱えている先輩たちは本当にすごい、と今感じている。

1976年生まれ　静岡県出身
法政大学大学院建設工学科修了
趣味：大学院時代に、フットサルで日本一になる。今は時間が取れない。

担当した主な物件（設計者）
五本木Nハウス　（大森伸一）

TOPICS/INFORMATION

「玉川田園調布の家（A・C・D棟）新築工事　地鎮祭」
世田谷区　11月9日

玉川田園調布の一等地に建つ、RC造の建売住宅3棟。
同一敷地に建つ他3棟の施工者・アトリウム建設との合同地鎮祭。

構造：RC造　地上2階　地下1階
用途：専用住宅
設計：阿部泰道／a-scope
完成予定：2006年6月

「吉祥寺Y邸　新築工事　地鎮祭」武蔵野市　11月17日

吉祥寺南町の閑静な住宅地に建つ、RC造平屋建てのデザインアトリエ兼用住宅

構造：RC造　地上1階
用途：専用住宅
設計：佐藤大／nendo
完成予定：2006年5 月

「本社事務所開きのお祝い」12月9日

本社移転のお祝いの会を社員および関係者で行いました。個人情報保護法施行に則り、受付・応接スペースのゾーニングなど、セキュリティに配慮したオフィスレイアウトになりました。ご来社の際は、まず受付の電話にてご用件を承りますので、よろしくお願い申し上げます。

編集後記
・構造計算書偽造問題の一連の報道は、建築業界全体の問題としてとらえられ始めています。再発防止に取り組むシステムを構築できるよう、それぞれの立場での意見や情報交換が求められています。

(株)辰　通信　Vol.69　発行日　2005年12月12日　　編集人：松村典子　発行人：森村和男